玉川上水と武蔵野市 水と人をめぐる物語

**発展を遂げる江戸のまちの飲み水を確保するため、
羽村から四谷大木戸まで約43キロメートルを開渠で通水した玉川上水。
昭和期、その流れは一時途絶えたものの、復活を望む市民らの声で見事によみがえりました。
命と暮らしに欠かせない水を確保しようと力を注いだ人々に思いをはせながら、武蔵野市と水の物語をたどります。**

人々の暮らしを支えた武蔵野の水

武蔵野と水、人々との関わりは、今からおよそ3万年前の旧石器時代にまでさかのぼります。関東平野の南西部、現在の荒川と多摩川にはさまれた武蔵野台地は、富士・箱根方面からの火山灰が堆積してつくられた広漠とした原野で、水が容易に得られる土地ではありませんでした。それでも、台地の崖下からの湧き水、井の頭池や善福寺池などの池や、そこから流れ出る神田川や善福寺川などの河川の水を求めて周辺に人々が住むようになりました。現在の井の頭恩賜公園・井の頭池の周辺では旧石器時代からの遺跡が発掘され、人々が暮らしていた痕跡が確認されています。

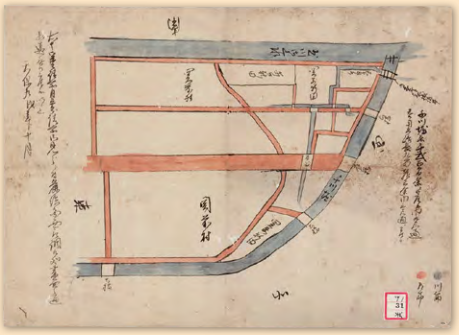
時代が下り、徳川家康が江戸幕府を開き、江戸のまちが発展する一方、明暦3（1657）年の大火をきっかけに人々が郊外へと移り住むようになり、原野が広がっていた武蔵野にもいくつもの村がつくられるようになりました。人々は畑作により生計を立てていました。水の乏しい台地上では人々の暮らしにとって水はかけがえのないものだったとみられます。雨が長期間降らない時には「雨乞い」をしたようです。『武蔵野市史』編さんの際の民俗調査によると、吉祥寺村の人々は井の頭池の水に神聖な力を見出し、その水を酒だるに入れて武蔵野八幡宮まで運び、神仏に見立てた丸太にかけて降雨を願ったといいます。

江戸と郊外をつないだ玉川上水の流れ

武蔵野に住む人々と水との関わりに変化をもたらしたのが、承応2（1653）年に江戸幕府が開いた玉川上水です。江戸のまちの発展とともに人口が増加し、飲み水の需要が高まったことから、老中松平伊豆守信綱を総奉行として玉川上水が開かれました。多摩川の水を羽村の取水口から取り入れ、四谷大木戸まで約43キロメートルにわたって開渠で通水する玉川上水を、当時の土木技術で開削するのは並大抵のことではありません。しかし、工事を請け負った玉川兄弟（庄右衛門と清右衛門）の指揮のもと、着工からわずか7カ月で完成したといわれています。

玉川上水の中流域は武蔵野台地の高い場所を通るように開削されました。玉川上水からは野火止用水をはじめとする分水が作られ、台地の村々に水が引かれました。しかし、吉祥寺村など早い時期に開かれた武蔵野市域の村々では、境村に分水が引かれた以外は、玉川上水の水を使うことを認められませんでした。享保7（1722）年に江戸幕府は全国的に新田開発を奨励し、武蔵野では新たに新田が開かれました。新たに開かれた武蔵野新田には玉川上水からの分水が認められ、しかも武蔵野新田の村々には水料という使用料は免除されました。武蔵野市域では、関前新田に分水が引かれ、主に飲み水として利用されたことが記録に残されています。

また、現在からは想像しづらいかもしれませんが、明治の一時期、玉川上



▲関前新田普請所見分絵図　天保9（1838）年10月
（武蔵野市保管 井口家文書）

▲玉川御上水通船揚場問屋連名控
明治4（1871）年11月
（武蔵野市所蔵 平野家文書）

水は船を利用して物資を運ぶ水路として使われていたこともあります。羽村の名主らが新政府に船の通行を請願し、明治3（1870）年にこれが認可。羽村から内藤新宿（現在の新宿御苑付近）まで、船が運航されました。中流域の村々も通船事業に参画するようになり、武蔵野市域では、現在の桜堤にある新橋付近に船だまりや物揚げ場が設けられ、境村の年寄（村役人）斧右衛門と組頭佐七が問屋をしていたことが記録に残っています。

武蔵野市域でどのような荷が積み込まれていたのか詳細は不明です。現在の立川市の河岸からは、八王子の市で取引された薪炭、織物などが積まれていたとみられることから、武蔵野市域からも近くの村で採れた農作物などが積まれ、都市部へと運ばれていたと考えられます。ところが、この玉川上水の船の行き来は、明治5（1872）年には禁止になってしまいます。船の増加によって上水が汚れ、市中の用水に支障をきたすというのがその理由でした。わずか2年のことでしたが、玉川上水を船が行き交い、武蔵野と都心をつないでいた光景は、水運が栄えた江戸のまちの面影を感じさせます。

市民らの声が清流をよみがえらせた

昭和に入ると東京の人口急増に対応するため、各地に貯水池や浄水場が建設されます。昭和35（1960）年に東村山浄水場が建設されると、それまで玉川上水の水を浄化していた新宿・淀橋浄水場の機能を移管することになり、淀橋は閉鎖。これに伴い、玉川上水の機能は羽村の取水口から小平監視所（立川市）までとなり、武蔵野市域の玉川上水もこの時点で流れが止まってしまいました。

その結果、ごみが投げ捨てられるなど、玉川上水の荒廃が進むことに。また、東京都では機能していない部分を埋めて道路にする計画が持ち上がります。しかし、当時、武蔵野市在住だった野田宇太郎（詩人・文芸評論家）をはじめ、金子光晴や中村草田男などの詩人・文化人らが昭和41（1966）年に「玉川上水を守る会」を発足。次第に賛同する市民らの声も広がり、上水の暗渠化・道路化を防ぐだけでなく、周囲の自然の保全を求める請願を都議会に提出しました。野田らは、上水の復活とともに、明治期に作家・国木田独歩が『武蔵野』で描いた玉川上水周辺の桜並木や雑木林の美しい景観を後世に残すべきだと考えたのです。その結果、昭和61（1986）年、都の進める「マイタウン東京」構想の中に玉川上水の清流復活事業が取り入れられることになりました。

当時の武蔵野市長も「貴重な水辺と緑を取り戻そうと、玉川上水を守る市民運動が武蔵野市から生まれました。清流復活の早期実現と、玉川上水を歴史的遺産として保存する史跡指定を東京都に対し働きかけ、マイタウン構想の中に清流復活を取り入れていただきました（大意）」とコメントをしています（『玉川上水 清流の復活』パンフレットより）。

こうして、玉川上水の流れはよみがえり、周囲の自然の景観とともに今も私たちに安らぎを与え続けています。平成15（2003）年には、暗渠部を除く約30キロメートルが、「江戸初期の水利技術を理解する上で重要な土木遺産」として国の史跡にも指定されました。近年では「玉川上水を世界遺産に」との声が上がるなど、その価値に再び注目が集まっています。

水の流れは決して当たり前にあるのではなく、さまざまな人々の熱意や苦心の証しといえるでしょう。そのことに思いをはせながら、大切に使っていきたいものです。

▲玉川上水の現況　開渠（ふたのない水路）部分　暗渠（地下水路）部分

参考文献／『武蔵野の玉川上水』『水と武蔵野』『玉川上水をあるく』（武蔵野ふるさと歴史館）、『玉川上水事典』（小平市玉川上水を守る会）ほか